

民族誌co-labo 100

田沼幸子

目的

- 📖 100人が読んで面白いと思うような民族誌を書くこと
- 📖 「誰も読まない」と言われている博士論文を、異なる地域とテーマを研究する、所属の異なる人類学者が読みあわせ、書くこと、読むことの面白さを引き出していく

方法

- 📖 COE「インターフェイスの人文科学」の「若手研」で久保田美生さんが提案した「討議マップ」を活用
- 📖 MLであらかじめ論文や草稿を読み、疑問点や意見をあげてもらって、著者は答えられるものには答えておいてから当日、望む

昨年度の主な活動

- 📖 GCOE助教(当時)の酒井朋子さんがすでに提出した博士論文、京都大学に博士論文提出予定の佐々木祐さんの草稿を読み合わせ、議論した
- 📖 メンバーで日本学術振興会特別研究員／大阪大学(当時)の佐川徹さんが民族誌を仕上げた

参考: 佐川徹氏の民族誌



酒井さんの会



佐々木さんの会



ex.酒井map



資料と通信

西真如

民族誌co-labo100の試み
ー「書き手」と「読者」による親身の討論空間
『コンフリクトの人文学 3』 p.267-275

今年度の目標

📖 大阪大学出身のメンバーでこれまで論文を読まれていない者(奥田若菜、椿原敦子、伊東未来)の論文、草稿をまな板にのせる

今後の展望

📖 もともと、「博論を書くこと」が辛く、無意味に思えることに悩む人々に、そうではないと励ましあい、人類学を専門家のみならず、専門外の読者に開こうとする構えをつくることが目的だった。

今後の展望(続き)

📖 多くが博論を執筆し、幅広い読者を対象とする執筆活動や、専門とは異なる学生を教育する立場になりつつあり、当初の目的はほぼ達成されたと言える

